

現代英語における that 節補文とその特徴について 構文文法的考察

片岡 那月

1. はじめに

一般に、補文標識 *that* の有無には、文体的・談話的要因が大きく関与することが指摘されてきた。また、Biber et al. (1999: 680) は、*I hope [that] you realized [that] they said a few words on there.* のような文において、補文標識の有無が自由変項であると指摘している。このような構造に関して、統語論分野では、補文標識の有無によって構造が異なると指摘している研究もあるが (中島 (1996, 2016); Shim and Ihsane (2017) ほか)、そのどれもが、1) 動詞依存的な分析、2) 機能範疇等の目に見えない構造の仮定、に終始しているように思われる。

そこで本稿では、*that* 節補文が補文標識の有無によって多様な振る舞いをすることを示し、*that* 節補文の統語的・意味的特徴は構文 (cf. Goldberg (1995)) として捉えられることを示す。また、中右 (1983) による「既定性」の概念が重要な役割を果たすことを示す。

2. 先行研究

統語的分析によると、*They [said / whispered] that Johnson was misled.* のような例において、*say* のような架橋動詞と、*whisper* のような発話様態動詞 (以下、MSV) とでは、外置 (= (1), (2))、受動化 (= (3), (4))、*wh* 抽出 (= (5))、補文標識削除 (= (6)) 等の統語的振る舞いが異なるという。このことから、架橋動詞に後続する *that* 節補文は項 (argument)、MSV の場合には付加詞 (adjunct) であり、後者は要素の抜出を容認しない島 (island) を形成するとされる。

- (1) That snow is white, everybody believe. (Tanaka (1991: 71))
- (2) a. *That it is raining, John sighed.
b. *That Mary is in danger, John screamed. (Moltman (1989: 305))
- (3) That snow is white was believed by everybody. (Tanaka (1991: 71))
- (4) a. *That the room was too cold was sighted by everybody.
b. *That Amary is in danger was screamed suddenly by John. (Moltman (1989: 305))
- (5) a. What_i did John say that there were _{t_i} in the caviar?
b. *What_i did Martin shriek that there were _{t_i} in the caviar? (Kuwabara and Matsuyama (2001: 29))
- (6) a. They said (that) Johnson was misled.
b. They whispered *(that) Johnson was misled.

だが実際には、MSV に後続する *that* 節補文が項としての振る舞いを示す例も指摘されている。

- (7) It was whispered that he had earned between two and five million dollars in one 18 month period. (iWeb)
- (8) Who did Bill mutter that he doesn't like? (Stowell (1981: 406))
- (9) She screamed she had to have both. (Bolinger (1972: 33))

これらの例から、動詞依存的な分析では実際の言語事実を捉えられないことが示される。また、Storms (1966) などの指摘から、*that* 節補文の項と付加詞の地位にも段階性があると考えられる。

3. データの整理¹

補文標識 *that* が省略されることにより、島の効果が緩和されることが指摘されている (Borkin (1984))。

- (10) a. ?Tomorrow, I think that I'll leave.
b. Tomorrow, I think that I'll leave.
- (11) a. *Mary, I believe that is genuinely ill, but John, I believe that is only fooling.
b. Mary, I believe is genuinely ill, but John, I believe is only fooling.
- (12) a. ?This dress, I suppose that you'll want to wear home.
b. This dress, I suppose you'll want to wear home.
- (13) a. ?*Just who do you think that you are, any way?
b. Just who do you think you are, any way? (Borkin (1984: 84))
- (14) a. *What did Bob rejoice [that Mary had done *t_i*?
b. *What are you surprised [that the dog hit *t_i*?
c. *Here is a man who Bill is sorry [that Mary was in love with *t_i*. (Nakau (1981b: 5))

これらの振る舞いは、中右 (1983) の提案する「既定性」の概念によって原理的に説明可能である。つまり、補文

標識 *that* が義務的となる既定的補文からは要素の抽出が不可能であるということである (cf. Nakau (1981b: 2)). このことから、既定的 *that* 節補文は島を成し、構文によって要求される付加詞として捉えることが可能である。

4. *that* 節補文を構文として捉える

ここまで、*that* 節補文の振る舞いが「既定性」という談話情報によって決定されることを見てきた。これは、*that* 節補文を構文としてみなす際、当該構文の情報として、発話時の文脈、状況、談話情報まで考慮する必要があることを示唆している (cf. Hilpert (2019) ほか)。

上記のことを鑑みると、*that* 節補文は①標識なし *that* 節補文構文、②標識あり *that* 節補文構文とに大別することが可能である。それぞれ、以下のような構文として表示できる。²

①標識なし *that* 節補文構文

Syn: [C₁ SUB VERB] [C₂ SUB PRED]
Sem: [S newly commits to a non-presupposed proposition]

②標識あり *that* 節補文構文³

Syn: [C₁ SUB VERB] [C₂ δəʔ SUB PRED]_{isl}
Sem: [S presupposes the proposition y]

上記2つの構文は、「*that* 節補文構文」を上位構文として、以下のようなネットワークを形成する。⁴

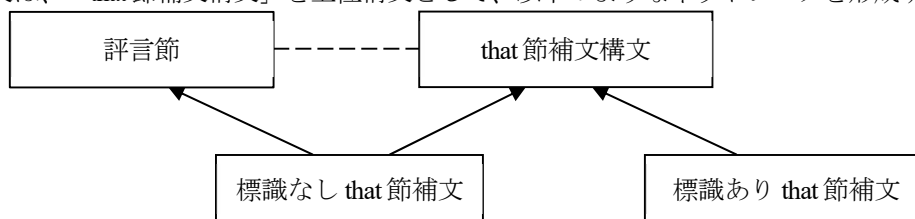


図1: *that* 節補文構文のネットワーク表示

5. おわりに

本研究では、現代英語における *that* 節補文について、補文標識の有無と統語的振る舞いとの関係を中心に、構文文法的な観点から分析を行った。本研究における分析は、*that* 節補文研究における構文文法的分析の可能性を示すものである。

¹ 本研究では、構文文法的アプローチによる研究で盛んに議論されている長距離依存 (LDD) を中心とした統語テストを対象とする (Dąbrowska et al. (2009); Goldberg (2006) ほか)。

² 当該表示は、思考動詞や発話動詞等に後続する *that* 節補文をスキーマ化して表示したものであり、動詞に応じてより具象化した表示が可能である。

³ ここで、統語表示における *isl* は *that* 節補文が島を成すことを示すものである。

⁴ 中右 (1981a: 427) は、非既定的な *that* 節補文に限り、*Mary is a fool, I believe.* といったように主節が遊離可能であることを指摘している。このような主節は通例、評言節 (Comment Clause) などと呼ばれるが (cf. Thompson (2002)), これらも含めた形でネットワーク表示をする必要がある。

主要参考文献

- Borkin, A. 1984. *Problems in Form and Function*, Nerwood: Ablex.
- Dąbrowska, Eva, Caroline Rowland and Anna Theakston. 2009. "The Acquisition of Questions with Long-Distance Dependencies," *Cognitive Linguistics* 20-3, 571-597.
- Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. 2013. "Backgrounded Constituents cannot be 'Extracted'," In: J. Sprouse and N. Hornstein (eds.), *Experimental Syntax and Island Effects*, 221-238, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hilpert, M. 2019. *Construction Grammar and its Application to English*, 2nd edition, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*, London: George Allen and Unwin.
- Nakajima, H. 1996. "Complementizer Selection," *The Linguistic Review* 13, 143-164.
- 中島平三. 2016. 『島の眺望：補文標識選択と島の制約と受動化』東京: 研究社.
- 中右実. 1981a. 「変形と意味の原理」『英語青年』第127巻第7号, 426-430, 東京: 研究社.
- Nakau, M. 1981b. *Extraction and Semantics*, m.s., University of Tsukuba.
- 中右実. 1983. 「文の構造と機能」『意味論』(英語学大系第5巻) 東京: 大修館書店.
- Shim, Ji Young, and T. Ihsane. 2017. "A New Outlook of Complementizers," *Languages* 2, 17, 1-18.
- Storms, G. 1966. "That-Clauses in Modern English," *English Studies* 47-4, 249-270.
- Thompson, S. 2002. "'Object Complements" and Conversation: Toward a Realistic Account," *Studies in Language* 26, 125-164.